

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる一助となるよう、今号からは、対話の場づくりに取り組む実践者に話を聞いていく。

なぜ、学校現場に「対話」が求められているのか

津屋崎ブランチ LLP 代表、
LOCAL&DESIGN (株) 代表取締役
山口 寛

やまぐち・さとる 行政、教育機関、地域、企業など、様々な場で対話を促進し、構成員が主体的に課題に取り組む集団づくりを支援するファシリテーターとして活躍。高校における探究学習で、生徒が対話のスキルを身につけるためのワークショップを行ったり、まちづくりをテーマにした住民会議で高校生ファシリテーターを養成するなど、高校現場や高校生とのかかわりも多い。本コーナーの監修者の1人(2017年6月号、8月号、2018年4月号、6月号を監修)。



対話のある集団で イノベーションが 生まれる

学校を取り巻く状況が変わり、学校全体として、そして教師一人ひとりとしての指導のあり方に変化が求められている今、校内の会議や研修における対話の重要性が増しています。なぜ、変化に対応するために対話が重んじられるのか。学校ではありませ

んが、興味深い例をお話しします。

先日、東海地方の僧侶たちの宗派を超えた勉強会にファシリテーターとして参加させていただきました。近年、檀家の減少という問題に直面している寺は宗派を問わず少なくありません。もちろん、寺にとって檀家数は重大な問題です。しかし、「どのようにして檀家を増やすのか」を考える前に、現代の寺は地域においてどのような存在でありたいのか、今、寺には何が求められているのかを話し合いたいと、若い僧侶たちが声を上げたのです。若い僧侶たちは、「寺のあり方、僧侶としての使命は今までと同じでよいのだろうか」と自らに問いました。

そして、資質・能力を重視する新しい学力観に基づいた指導の確立が求められている学校も、「学校や教師の役割」を根本から問い直すことが求められています。学校組織の中で先生方が多様な考えを語り合い、それらを混ぜ合わせ、変化する社会の中の学校、教師の役割を問い直し、新しい指導のあり方を構築していく。そのように学校現場でのイノベーションを起こすような自由な対話が必要でしょう。

大きな変革、イノベーションは、これまでの常識にとらわれずに課題に



同じ属性で、人間関係が固定化した集団であるほど、話し合いの場ではファシリテーターの存在が必要

向き合った時に生まれます。若い先生、赴任したばかりの先生も含め、すべての先生が、「これからの学校はどんな存在でありたいのか」「学校には何が求められているのか」を自由に語り合えた時、学校にもイノベーションが起こるかもしれません。

とはいえ、本質を問い直すというこ

とは簡単ではありません。特に、同じ属性の人が集まった集団、人間関係が固定化している集団にいる時、私たちは常識や思い込みに支配されがちですし、誰もが思ったことを自由に発言する会議にはなかなかなりません。だからこそ、対話を促すファシリテーターという役割が必要になるのです。

一人ひとりが対話の力を身につければ集団は強くなる

私がかかわっているサッカークラブの例をお話しします。そのクラブの監督は、全国に名を知られた強豪校でサッカーを学びました。現役時代の練習は非常に厳しく、監督にとってサッカーは楽しいものではなかったようですが、社会人になって数年ぶりにサッカーを再び始めた時、サッカーの楽しさに改めて気がついたのです。「サッカーが楽しいものであることを忘れてしまい、あの時の自分のようにサッカーを嫌いになっていく子どもがいるのではないか」。そう思った彼は、自らクラブを立ち上げました。

幼稚園児から大人まで200人以上のメンバーがいるそのクラブでは、今、練習メニューに対話を取り入れています。「二人ひとりがスキルアップすることも大切だけれど、対話を通してチーム力向上にも取り組もう」「サッカーを楽しみ、サッカーを通じて社会に貢献できる力を養うために、練習の



山口氏がつくる対話の場では、参加者に合わせて、写真のような「対話の心得」が提示される

中に対話を取り入れよう」と、監督はメンバーに呼びかけたのです。

月に数回、ファシリテーターとして私がそこで行っていることは、一見サッカーとは関係のないことです。よくするのが、絵や写真を見て、それをほかの人に言葉で伝えるゲームです。うまく伝わらなかったグループとうまく伝わったグループにどんな伝え方の違いがあったのかを話し合っています。自分で、自分の話が相手に伝わらない時、その理由は相手ではなく、自分の中にあることが多いことに気がつきます。そのゲームを繰り返すことで、一人ひとりの伝える力が高まってい

きます。また、そうした場に、保護者を招くこともあります。親子で取り組み中で、自分が子どもに対して常に「上から目線」で接していたことに気づき、子どもとの接し方が変わったという保護者もいます。

そのように、言わば対話のレッスンを繰り返す中で、選手同士の話し合いが練習中もおのずと増えていきました。また、合宿のルールを選手たちだけで話し合っただけで決めてもらったところ、ルールをみんなが守るようになり、監督やコーチの負担が激減しました。そして、チームは着実に成長し、今では地域の強豪に迫る活躍を見せるまじになっていきます。

その結果は、サッカークラブだから、子どもだからもたらされたことでしょうか。私はそうは思いません。大人は、「言っても分かってもらえない」と思い込み、伝え合い、分かり合うことを早々に諦めてしまいがちです。しかし、対話を重ねていく中で、伝え方や聞き方を学ぶことができます。そして、お互いを信頼し、集団として強くなるのです。それは学校という場において、先生方にも実現できることだと思います。先生方は、今、伝え合うことができているでしょうか。

対話によって 私たちは対立を 乗り越えられるのか？

最近、私は、学校の統廃合について行政と住民が話し合う場でのファシリテーターを務めました。統廃合か否かで行政、住民が対立する中、私は双方に、「自分の信念をぶつけ続けるのではなく、自分と相手の意見のメリット・デメリットを考えましょう。そして今、私たちの目の前にあるもの以外の選択肢は本当にないのかを考えてみませんか」と、繰り返し訴えました。

数か月にわたる話し合いの中、自分と異なる意見に向き合うことで、参加者は、「自分の意見＝全員の意見ではない」ということを少しずつ理解していきました。そして、統廃合か否かという二者択一でスタートした議論は、分校の設置などを含む4つの選択肢にたどりつくことができたのです。

私は行政に、「最後には1つの道を選ぶにしても、それ以外の道を選ばなかった理由をぜひ住民に説明してください。そして、その道を選択するこ

話し合いのプロセスが生かされていることが 分ければ、「これからも話し合おう」と 私たちは希望を持つことができる



とで生まれるデメリットにどう対応するのかも、併せて伝えてください」とお願いしました。話し合いの結果が自分が見たものでなくても、結論に至る過程で自分の意見に耳を傾けてもらえれば、参加者はそれまでの話し合いを無駄とは思わないでしょう。それは学校の会議でも同じですよ

ね。学校として目指すもの、教科や学年としての指導のあり方などを先生方で話し合う際、自由な対話によって表出した多様な意見を丁寧に拾い上げ、合意形成に反映していくことで、先生方は「これからも話し合おう」と、自分のいる組織の未来に希望を見いだせるはずです。